
異界で世直しアドベンチャー

天川桃花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界で世直しアドベンチャー

【Nコード】

N5342J

【作者名】

天川桃花

【あらすじ】

私、七瀬^{ななせ}未来はただ今家出中の元・女子大生。変わっている事といえ、人とは違った変わった能力があること。そんな彼女を襲った、地球ではない異界への招待とは！？

序章

いくら体を鍛えても、心が弱かったら意味がない。
どんなに腕っ節が強くなろうと、それに気持ちがついてこないと意味がない。

「うるせえ！お父さんなんて呼ぶんじゃないわねえ・・・バーローがつ・・・！！みつともない真似するお前が悪いんだろう！！」
「あんたは努力が足りなかったのよ！あんたのしたことはわがままで、親不孝なことよ！」

拳を防げても、蹴りをよけられても、目に見えないものから自分を守るができないのなら、それは強くなったことにはならない。
それぞれの言葉の武器を前に、私は深く傷ついた。

・ ・ ・

真っ赤な色をした鉄の塊の口に、私はそれを押し入れた。
差し入れて手を離せば、中で小さな紙のすれる音がした。

「・・・これで終わり。」

私は、封筒を入れたポストを眺めながら小さくつぶやいた。

「私の人生・・・どこで間違えたのかな。」

重たい体で回れ右をして、冷たい風が吹く道を自転車で走った。
行くあて等ない。

そして、帰る家もない。

ううん・・・正確には、帰る場所を自分で捨ててきたのだ。

「ふざけるな・・・！」

悔しくて悔しくて、周りの目も気にせず、泣きながら失踪した。

自転車に乗りながら泣いているこの少女は、七瀬未来^{ななせみき}20歳。身長158センチ、体重Xkg（非公開）のロングストレートをしたスレンダーな可愛い女の子。顔立ちはいいのだが、欠点があるとすれば小さな胸であろつ。

「大きなお世話よ（怒）！！」

それはさて置き。

実は彼女、数分前まで有名国立大学に通っていた女子大生であった。しかし、残念ながらもつ女子大生ではない。

先ほど、大学を辞める旨の書類をポストに投函したからである。

つまり、退学したてのただの20歳になったのだった。

「好きでやめたわけじゃないわよ・・・！」

泣きながら自転車をこぐ彼女の姿は、日中の街中では人目を引いた。しかし未来は、そんなことなど気にしない。

なぜなら、

「あーあ！・・・どこに行こうかな。」

家出の真つ最中であつたからだ。

「とりあえず、今夜はネットカフェに泊まろう・・・。」

前かごに乗せたバックには、必要最低限の持ち物が詰まっていた。財布や現金は絶対で、あとは自分の大事なものなどを入れていた。彼女が家出に至るまでの経緯は複雑だが、決心した理由は簡単である。

「・・・あんな家にいたら、私は一生、あいつらの奴隷だ。」
（親の言いなりで人生を台無しにされるのはイヤだ。）

そう強く思えば思うほど、彼女がペダルをこぐ動きは早くなるのだ
った。

序章（後書き）

はじめまして。

読んでくれてありがとうございます。

第1章 出会いはプライバシーの侵害付き

しつこいくらい続く振動で、私は目を覚ました。

見れば、マナーモードにしていた携帯が点滅している。

眠い目をこすりながら、画面を見れば、信用できる相手からの談話だった。

「もしもし？」

「あ！？やつと未来出たっ！今どこ！？」

「地球。」

「張り倒すよ！なにやってんの！？」

「寝てた。」

「そうじゃなくて！！」

私の返事に、電話口の相手はイライラしていた。彼女が怒っている理由を私は知っていた。

「未来、3日も家に帰らないで何してるの！？おばさん心配してたよ！？」

「・・・私の女主人に会ったの？かなちゃん。」

「ちゃんとお母さんて言いなさい！！」

冷めた声で言えば、眠気が覚めるような罵声が耳に響いた。

電話の相手は親友のかなちゃん。高校からの付き合いで、私の大事な親友だった。

「てか、どうしたの？平日の昼間に電話してくるなんて。仕事はどうしたの？」

「仕事どころじゃないよ！未来が家に帰らないって、昨日おばさんから連絡もらってから、ずっと探してたのよ！？携帯にもメールにも出ないし！」

そこは、『メールの返事も来ないし。』じゃないのかな。

そんなことをぼんやりと考える私に、彼女はさらにまくし立てるように言った。

「私だけじゃないよ！先生達だって探してくれてたんだから！」

「牛島先生が？」

もう、生徒じゃないのに。

「おばさんが先生に知らせたんだよ！おばさん・・・泣きながら言
つてたよ。自分が無理やり未来を辞めさせたから、それが原因で病
気にもなつたんだって。」

今更なに言ってるの？

「先生もね、病気のリハビリ感覚でいいから、昔みたいに習いに来
たらいいって！みにくるだけでもいいって言ってるんだよ！？無理
に組み手をしなくていいから、型だけでもしてみないかって。」

型は毎日してるよ。空手辞めてからもずっと・・・！

「え？ずっと？」

「・・・あ。」

どうやら、言葉にしていたらしい。

「未来、あれからずっと空手してたの？」

「・・・。」

答えるのが面倒くさいから答えなかった。

「3年間、ずっとやってたの？毎日欠かさず・・・。」

興奮気味だった声、落ち着いた声へと変わる。いつも話す時と、楽
しく談笑する時と同じ声になっていた。

「そうだったんだ・・・。未来は毎日練習してたのに、私は全然気
づかなかつたんだ・・・。」

でも、その声はどこか悲しそうで、聞いているだけでつらかった。

「私、ぜんぜん気づかなかつた。ごめんね、未来・・・。私、未来
とずっと一緒だったのに。道場に通り始めた時から友達なのに・・・
！」

「4年近い付き合いだったね・・・。」

気づいた時、そう口にしていた。

私とかんなちゃんが話す先生とは、同じ空手道場の牛島師範のこと
である。

そう、私は空手が縁で知り合った空手つながりの友達であり、仲間だった。

彼女と出会ったのは、第一志望の高校が受かった頃。

合格報告を道場に伝えるに言ったところ、同じように報告に来ていたのがかなちゃんだった。

かなちゃんは、高校進学を機に、学校に近い私の通っていた道場へと移ってきたのだった。お互い、同じ年頃の同性仲間がいなかったこともあり、すぐに私達は打ち解けた。

しかも、階級も同じだったので、組み手の相手としても最高だった。こう見えても私、黒帯暦数年のキャリアを持つ、立派な武術者なのです。

「未来がいたから、安心して道場も変えられたんだよ、私。やっぱり、人も重要だからね。」

「・・・私も、かなちゃんがいたから頑張れた。励ましてもらえたのがうれしかった。」

「私もだよ。」

練習が厳しくて、何度もくじけそうになったけど、やっぱり好きだからやめられなかった。

かなちゃん達、仲間がいたし、強くもなりたかった。

でも、なによりも空手をするのが楽しかった。

厳しいけど、自分がやりたいと思ったから続けていた。

（楽しく、学べればそれでよかった・・・。）

勉強そっちのけというわけではないが、学年があがるにつれ、それなりに両立はしていた。

（両立をしていたのに・・・！）

「好きなことを我慢させたのがよくなかったって言ってたから、また空手させてもらえるよ！だから、帰っておいでよ。」

「・・・そんなの無駄だよ。」

「どうして？」

「今までだって、一度甘い言葉を言ったら、最後まで守ってくれた

ためしがないもの。」

それまでの無気力な返事とは一変し、力強い声で未来は言った。これには、電話口の相手も一瞬押し黙ったが、

「とにかく、早く帰っておいで！あれだったら、私が迎えに行くから！」

未来を刺激しないように、諭すような口調で言い直したのだった。

この言葉に、彼女はかすかに反応した。

「・・・迎え？」

「そう！未来のいる場所まで迎えに行つてあげるから！」

「なんのために？」

「なんのつて・・・！？」

「かなちゃん、私家出したんだよ。やっと、あの家を出れたんだよ？帰りたくない・・・もう、ヤダ。」

「じゃ、じゃあ、うちにおいで！しばらく、うちにいていいからね？」

「よそ様にご迷惑をかけるようなことできないよ。」

「病人が変な気を遣うな！！」

「病人つて、誰が？」

その問いで、騒がしかった声が一瞬静かになる。

「・・・私、別に風邪とかひいてないよ？」

「・・・ひいてるよ。心の風邪を・・・引いてるでしょう？」

しばしの沈黙の後、慎重な声でかな未来に告げる。

「未来は・・・まだ軽いウツだから、ちゃんと治療すれば治るよ。」

だから、ひとまずうちにおいで。」

カルイウツ。

軽い・・・ウツ。

「それで私が、病人だつてかなちゃんは言うの？」

「・・・自覚はないかもしれないけど、今の未来の体は、病気で弱ってるんだよ。だからね、私が迎えに行くから、しばらく私の家で休もう。ね？」

「自覚はあるよ。」

返事のようにそういつてから、しまったと思った。

「ああ・・・口に出しちゃったか・・・。」

そんなつぶやきも、口にしてしまう馬鹿な自分。

「いいんだよ！言いたいことは、口にすればいいのよ！だから未来、今どこにいるかー」

「かなちゃん。」

相手の言葉をさえぎってから自分の気持ちをつむいだ。

「ごめんね、ありがとう。」

できるだけ平静を装いながら、電話を電源後と切った。

お気に入りの待ち受け画面は、程なくして真っ暗になった。

「・・・・・・・・まいったな。」

親友にはつきりと、病気だといわれてしまった。

私は、自分がうつ病であることは自覚していた。

だって、それが大学を辞めた原因の半分だから。

「死にたい・・・。」

口の中でつぶやいてから、体にかけていた毛布を頭からかぶる。

家で三日目の昼間、私は行きつけのネットカフェで惰眠をむさぼっていた。

寝ても寝ても、疲れが取れない。

寝ているのか起きているのかわからない状態が続く。

次第に、生きることへの執着が薄れていつていた。

「・・・死にたい。」

その気持ちだが、言葉となつて口からボソボソとあふれ出ていた。あまり好ましくない単語を、断片的に繰り返していた。

「寝よう・・・・・・・・。」

眠ることなどできないけれど、私は目を閉じて、周りのすべてを遮断するかのように毛布を体に巻きつけた。

・

・ ・ ・

・・・して？

ど・・・て・・・の？

美しい女性がいた。胸元が大きく開いたドレスをまとい、きれいな細工が施された大きなヒスイのイヤリングをつけていた。

「・・・どうしてなの？」

太陽の光が差す、日当たりのよい部屋でその女性は嘆いていた。

風が女性の頬をなで、艶のある髪がゆらゆらと揺れていた。色はわからなかったが、伝わってくる感覚からは黒髪だと認識できた。

顔はベールのような薄い布で覆われていて、その表情はわからない。しかし、泣いているということはわかった。

彼女が、どうして嘆いているかはわからない。

ただ、伝わってくる感情からは、強い戸惑いを感じとれた。

「私はそんなことできない・・・！助けて・・・私を助けて・・・

・・・！」

（え？）

『助けて』という言葉のあとに、誰かの名前を口にした。でも、その名前が聞き取れない。

（日本人の名前じゃない・・・？外人の名前？）

ふいに、場面が変わる。

空には小さな光がちりばめられ、やわらかい光を発する球体が浮かんでいた。それで夜であることがわかった。

月明かりの下、ある部屋の中に見覚えのある女性がいた。

先ほどの彼女だった。

その女性は、化粧箱のようなものの中から、何かを取り出していた。しきりに辺りを気にしながら、カバンにそれを入れこんでいた。

逃げなければ！これを持って、ここから逃げなければ！

彼女はそんな気持ちで、自分を狙う敵から何か大事なものを守ろうとしていた。

「大人しく渡せ！」

いくつもの音と重なる罵声。彼女はその声に反応し、表情をこわばらせた。

古城のような場所を彼女は必死で逃げていた。

レンガでできた廊下を、真っ青な顔で彼女は駆け抜けていたのだが、

「……もう逃げられない……！」

女性が肩にかけていたショールが、視界の中を舞う。

それにあわせて鼻につく変な匂い。

（焦げ臭い……？）

そう思った瞬間、彼女は目の前にいた。

「ひっ！？」

真っ赤に燃えさかる炎が彼女の体を燃やした。

「なにこれ！？なによ、これ！？」

私の目の前で、顔を覆いながら火達磨になっていく女性。

苦しそうに暴れながらも、それでも逃げようと、燃えながら走り続けていた。

「！？危ない！」

そう叫んだが遅かった。下を見向き、手探りで壁伝いに逃げていた彼女は、壁が途中でなくなっている場所に手を伸ばしてしまった。そして、

「ああっ……あああああああああ！！！」

悲痛な叫びを上げながら落下して行った。その下は、岩肌ばかりの場所。高さもあり、落ちれば命の保障などないようなものだった。

「うそ……死んだ、の……？」

彼女がどうなったか。女性が落ちた場所を除けば、

真つ黒の墨の塊。

二つのにごった球体がこちらを見ていた。

「み・・・・・・・・こお・・・・・・・・！」

その声にあわせて、球体の下の部分にポツカリと穴があいた。

「——————いやあああああああ！！」

「どうしました！？お客様！！」

自分の悲鳴と他所の声で目が覚めた。

「あ・・・・・・・・？」

肩で息をしながら声のする方を見る。

めがねをかけた店員が、心配そうに私を見ていた。

「だ、大丈夫ですか・・・・・・・・？」

「あ・・・・・・・・すみません。な、なんでもないです・・・・・・・・！」

寝言ですと言い訳し、繰り返し何度も謝った。

私の声は、店員だけでなく、周囲の客にも迷惑をかけてしまっていた。突き刺さる視線や聞こえてくる文句に耐え切れず、そのまま会計を済ませて店を出た。

外は冷たい風が吹き荒れる夜だった。

（また・・・変な夢を見た。）

昔から、夢を見ることが多かった。

それがただの夢ならいい。

私を見る夢は、

（・・・・・・・・この景色は！？）

あることに気づき、慌てて近くの店の中へ入った。

程なくして、その背後で大きな音が響いた。

「痛つてえ・・・・・・・・！」

「ちよつと！大丈夫、あなた達！？」

そこには、飛んできた看板に当たり、自転車のままひっくり返った

高校生達の姿があった。

（また夢の通りだ・・・。）

そう、私の見る夢は、その多くが現実にかかること。

予知夢なのだ。

「・・・自分が見たい未来は見れないんだけどね。」

通行人に助け起こされる男の子達を見ながら私はつぶやく。

私が見る予知夢は、先に起こる身近な現実を教えてくれる。

そして、ある一定の規則性を持っていた。

一つ、見る内容は、数日から一年以内に起こる未来の出来事。

一つ、夢の中ではにおいや味などを認識することができる。

一つ、夢で見る映像は白黒かセピアなので視覚で色を認識することはできないが、感覚として何色をしているかは伝わってくるのである程度は理解できる。

一つ、見た内容は、その出来事が起こる直前に思い出せる。

一つ、夢の内容が好ましくなければ、それ自体が起こらないように回避することができる。

現実には、起こらないようにすることができる。

「・・・そっか。これを見た時、回避するのを忘れていたんだ。」

予知夢を回避する方法。

それは、夢を見た直後に、見た内容を口に出して否定すればいい。

例えば、テストで悪い点を取る夢を見たとする。その場合は、目が覚めてすぐに、「私はテストで悪い点を取らない。」と、夢と逆のことを口にすればいいのだ。

でも、これは毎回回避できるとは限らない。

目が覚めてすぐに、見ていた夢の内容を忘れてしまうことがあるのだ。

忘れてしまった夢が、楽しかったか楽しくなかったは、気持ちとして残っている。

夢から覚めた時、嬉しい気持ちであるか、嫌な気持ちであるかが、それを判断する基準である。少しでも、かすかに覚えていれば、覚えていることだけでも口にすれば、それは現実に起こらない。

高校生が飛んできた物にぶつかって倒れる夢は、数ヶ月前に見ていた。

その時は、起きてすぐに夢の内容を忘れてしまっていたが、かすかに覚えていたのだ。

私に何かがぶつかる夢を。

だから私は、「私にぶつかりませんように。」と、覚えていることだけを口にした。

もし私が、見知らぬ高校生のことも覚えていれば、彼らも看板にぶつかることはなかっただろう。

信じられないかもしれないが、そうやって回避できたことが過去にある。

それが、私の見る予知夢の規則性であり、ルールなので・・・！？あ・・・違う！そうじゃなかった！それだけじゃなかった！！

もう一つあった。

一番重要なことがあった。

唯一、私が見ることができない夢が、『未来』があった。

私が見る夢の内容は、私が望むものは見せてくれない。

私が予知夢を見たいと願った内容は、夢として見せてくれない。

例えるならば、気になるドラマの内容やテスト結果などがそうである。

無論、宝くじや競馬の結果などもそうである。（しないからいいけどね。）

つまり、自分の意思で自分が見たい未来は見ることは出来ないの。

だから、これから起こるであろう未来のことがすべてわかるわけではない。

なんでもわかって便利というわけではないのである。

他の人から見れば、超能力みたいな分類に入るかもしれない私の力でも実際は、私の日常生活では、なんの役にも立っていない。

私の名前の『みき』は、『未来』と書いて『ミキ』と読む。

それにもかかわらず、自分の未来はまったく読めない。

・・・役に立っていないからこそ、家出という行動を起こしたのかもしれない。

「寒い日は、肉まんが美味しい。」

とっさに入ったコンビニで買った肉まんを頬張りながら、フラフラと外へでる。

寒い風が吹く中、人ごみを歩けば、目に付くのは仲の良い家族の姿。

「いいなあ・・・。」

家族愛というものに、ひどく憧れる。

多分私は、家族には愛させていた方だと思う。

でも、利害などが絡んだ結果、破綻してしまったのだ。

親は破綻したなんて思っていないかもしれないが、こっちから、子供からすれば破綻したと思っている。

「てかさ・・・。」

（今は、それすら考えるのも嫌だ。）

嫌なことは考えないようにしよう。現在の私が考えるべきことは――

「・・・採用が決まった、住み込みの仕事場所に行くこと。」

家出理由はともかく、家を出る以上、一人で生きていかなくちやならない。

貯金はある程度あったけど、働かないといずれなくなってしまう。

住む場所がない以上、住む場所のある仕事をみつけるのが先決だった。

幸い、数週間前に応募して、一週間前に受けた面接の結果が、数日

前に届いた。

パチンコ屋さんでの仕事の採用が決まった。

主な仕事はドリンクサービスだが、場合によっては、他の業務もしてもらうとの内容だった。週休二日だし、多少の労働も耐えられるだろう。

そもそも、体調が悪くなった原因を作った家から出ることができた。悪いものから離れられれば、私は良くなる。

もう大丈夫だ。

「お待たせいたしました。このバスは、西園寺行きの――」
ウグイス嬢のようなアナウンスで我に返る。

採用が決まったお店まで行くバスが、到着していたのだ。

途中に付属の小学校があるので、降りてくるのはランドセルを背負った小さな子供達。

それを横目で見送りながら、整理券を取って乗り込んだ。

座ったのは、前方右側の二人用の席。

本当は、一人用に座ればよかったが、荷物を抱えていることもあってその席を選んだ。

幸い、私が乗り込んだバス停から乗り込む人間は少なく、発射した車内は、私を含めて十人にも満たない乗客。

（とりあえず今日は、職場の店長さんと挨拶をして、寮に荷物を置いてから、簡単な仕事の説明を受けて、明日に備えて休む。・・・だったかな。）

採用の電話で言われたことを反復しながら、外の景色を眺めていた。今が何時かわからなかったが、真っ赤な夕暮れを見る限り、夕方であるのは確かだった。

（真っ赤つか。まるで、炎みたい・・・。）

ぼんやりとそう考えた時、脳裏にあの映像がよぎった。

『ああつ・・・あああああああああ！！』

紅蓮の色に染まりながら、黒く変わっていく体。

一人の女性が燃えていく映像。

（やだなあゝ．．．あれも、これから起こる未来の出来事？）

そうは思ったが、もう一度夢の中の映像を思い出して、小さく首を振った。

（いやいや、ありえない！服装からして違うもん。あの子の服、一昔前の中世ヨーロッパ風だった。今時、あんな服を着て日常生活送ってる子なんていないわよ。どこかの王家や皇族だとしても、ちょっと違う気がするし。背景にしても、外国の古いお城のようだったけど、壁に穴が開いたままのお城なんて聞いたことない。人が住んでいないならまだしも、あれは人が住んでいる生活感があつたし。それに、お城に住んでいる人は今でもいるけど、そういう人は自分の住んでいる場所がお城だっただけじゃなく、歴史的価値があるってわかってる。ベルサイユ宮殿がいい例じゃない？だからこそ、壊れたらきちんと修理している。穴があいたまま放置すれば、あの女の子のように落ちてしまうし。）

なによりもあの光景は、

（殺し合いの場面．．．？いいえ、戦争かなにかで、襲撃を受けて逃げている最中だった気がする．．．。）

ヨーロッパの方で、戦争をしているなんて話は聞かない。

知らないだけかもしれないけど、そうだとするとあのヒラヒラのドレスはないでしょう。

（まるでお姫様かなにかみたいだったし。そう言えば――）

『み．．．こお．．．！』

（最後の言葉．．．あれって、人の名前だったのかな？）

私が聞いた単語は、『み』と『こ』と『お』だったよね？つまり、それをつなぎ合わせた名前だとしたら？

「ミーコオ？ミイゴ？アミーゴ？あ、アミーゴは名前じゃないや。」

あの焦げた体が口にしたのは

「みこ。」

（．．．『みこ』って言ったのかな。でも、外人の名前で『みこ』ってないよね？）

夢で見た西洋的な風景を思い出しながら考える未来。

（じゃあ、『みこ』の二文字が入った言葉？伸ばした言葉を言おうとしたのかな？そうになると、考えられる名前となると――）

「――ミーコ。」

（だと、猫だよね。）

「ミミコ。」

（これも日本人っぽい名前だ。）

「ミンコ。」

（なんか違う。）

「一文字変えれば、インコ。」

（これじゃあマジカルチェンジだ。懐かしい）

「ミケランジェロ。」

（あ。さらに離れた。）

「・・・なにやってるのかなあ・・・」

そこまで考えて苦笑する。

（なに真面目に考えてるんだろ）馬鹿馬鹿しい！きっと私が見たあの夢は、映画か何かで見る物語の一場面だったのよ。きっと私は、そういう映画を見に行くのよ。・・・そうじゃなきゃ、あまりにも現実離れしてるし。）

最近の映画は、リアリティを実現するものが増えている。それを思えば、あの迫力ある焼死場面もうなずけた。

「そうよ・・・あれは、この世界ではありえない、別世界のお話・・・。」

組んでいた手を解きながら、窓の側で肩肘を突いた時だった。

――ギイイイイイ！！

「え！？」

突然、金属のこすれるような、ねじれるような音がした。

「な、なに！？」

そう言い終わらないうちに、車内が明るくなった。

真っ白なまぶしい光が目につく。

「なに！？車のライト！？」

荷物を掴んで立ち上げれば、強い風が未来を襲う。

「ちょ！？なに！？」

（事故でも起きたの！？）

わけがわからずあたりを見渡せば、周囲からは悲鳴や叫び声が聞こえた。

（事故つたの！？）

慌てて、座席にしがみつこうとした時、未来の視界に場違いなものが移る。

「はぁ！？」

混乱する他の乗客の中に、異質な姿を捉えたのだ。

「え・・・・・・・・？」

見覚えのあるシヨールにヒスイの耳飾り。

流れるような黒髪。

「・・・・・・・・え？」

逃げ惑う人達の中で、一人だけ何事もないように立っている女性。

その顔は、薄い布で覆われていて見えないが、見たことのある姿に未来は身震いした。

「なん、で————！？」

（夢で見た女の子がいるの————！？）

逃げようと、一歩足を踏み出した時だった。

「・・・・・・・・お許してください。」

「ひっ！？」

頭の中で響く声。

「・・・・・・・・どうか、お許してください・・・・・・・・」

謝罪としか取れない言葉。

「私は・・・・・・・・あなたを守れない・・・・・・・・」

その声に合わせるように、両手を未来に向けて差し出す女性。彼女の両手の中指には銀の指輪がつけられており、そこから赤色の薄い布が垂れていた。

（アラジンに出てくる女性がつけてそうな薄布だ・・・！）

身構えつつも、そんなことを考える未来に、謎の声が語りかけた。

「お許しください・・・！本来ならば、私があなたをお守りし、国の危機の際は、私があなたをお呼びしなければなりませんでした。それが・・・！」

「あ・・・あの！私の頭の中で聞こえる声は——・・・あなた？」

人を指差すのは失礼だと思い、右手を開いて向けながら問えば、相手はそれに答えた。

「・・・はい。」

まったく動いていなかった口の代わりに、首を小さく縦に動かしたのだ。

「・・・直接、あなたのお心に問いかけております。」

「へ、へえ・・・すごいですね？」

苦笑いしながら言えば、相手はさらにかしこまりながら声を伝えてきた。

「あなた様には、お詫びしてもお詫びしきれません。」

「お、お詫び？」

（なにを謝るっているの？私に詫びるって何を？こんな子私は知らないのに！？）

不可解な相手の言葉に、未来は混乱を隠せない。しかも相手は、そんな状態の未来お構いなしで話を続ける。

「細かくお話はできませんが、これだけはお伝えいたします。」

「え！？な、なにを！？」

「あなたを呼び出す者は、悪しき心の持ち主。私利私欲のため、あなたを利用するつもりです。その証拠に、『虹の源』を持っています。」

「にじのみなもと・・・？」

「そして、これだけは覚えておいてください。あなたは、あなた様は選ばれしお方。恐れ多くも、こんな私と一対となる存在なのです。」

「いつつい??」

「昼と夜、右と左。前と後・・・陰と陽となる・・・鏡のように同じでありながら、対照的な存在なのです・・・!」

「・・・はい?」

（本当になに言ってるの、この人?さつきから意味がわかんないんですけど!?)

「・・・そうでしょうね。今は、私の申していることの意味がわからないかもしれません。」

「えっ!?!」

未来の心を読んだかのような言い方に、言われた本人は固まる。

（心を読んだ!?!）

「はい。拝見しております。」

「っ!?!?」

偶然にしては出来過ぎている相手の言葉。

それに凍りつき固まれば、相手は再度、未来に訴えかけてきた。

「私達は、対照的な一対となる存在です。魂はつながっているので、お考えやお心を見ることは可能です。もちろん、過去の記憶なども・・・。」

「ちょ、じゃあ!?!今、私の心を・・・読んだの・・・!?!」

「今も拝見しております。」

「プライバシーの侵害しないでえええ!」

（なんなの一体!?!）

威嚇の意味を込めてにらめば、女性は小さく首を振りながら言いました。

「混乱させてしまうのも、重々承知しておりました。今は私からしかあなたのお心を拝見することしかできません。しかしあなたも修練を積みめば、私の心を読むことができますので。」

「いやいや!見るつもりはないから!」

（自分がされて嫌なことを、わざわざ人にすることないし!）

「・・・そうですね。もつとも、こんなことが出来るのは限られたものだけですし。」

「まあ・・・普通は、人の心なんて読めないけど。」

（相手の気持ちがわかれば、今までの人生、どんなに楽だったことか・・・。他人が何を考えているかわかれば、いろんなことが防げたかもしれない。）

「はい。多くの場合は防ぐことが出来ます。」

未来の心を読みながら女性語る。

「特に私は、あなたと一番つながっている一対となる存在・・・。にもかかわらず・・・あなたを、巻き込んでしまったこと、悔やまれてなりません。」

悲しそうな声色でいうと、向けていた両手を下げながら告げたのだ。「残念ながら、今の私は身動きひとつ取れない状態。あなたをお助けすることはできません。しかし、あなたの助けとなる者が、あなたを守り、導きます。」

「へ!？」

（守る?導く!?)

「きつと、きつとあなた様なら成しえるはずです。コトネアスターに住み者達すべてのために・・・!」

「ちよつと待つて!さっきからなに言つてるの!?!そもそもあなた誰!?!」

あまりにも突拍子もない登場に、根本的な質問を忘れていた未来。女性の名前と正体を聞いたのである。これに対して相手は、

「私は——・・・。」

悲しそうな声色を、戸惑いへと変える。

それを氣遣うことなく、ハッキリと未来は聞いた。

「あなたは・・・何者なの?」

「あ・・・。」

未来の問いに、迷うような考えるような声を漏らす女性。

「・・・私は——・・・!」

そう言い掛けて、言葉を詰まらせる。そのまま、なにか考えるように動きを止める女性。

しかし一呼吸おいてから、何か覚悟を決めたかのような口調で彼女は告げた。

「私は――『コトネアスターの守護の巫女』の称号を持つ者、アイリス・・・！私はコトネアスター象徴のシンボルであり、コトネアスターの人々と平和のだけを守り、祈る巫女。人は私を『聖なる巫女』と呼んで下さいます・・・。』」

そう言うと、下ろされていた黒髪の中に手を差し込む女性。その手が引き抜かれた時、なにかが光るのを未来は見た。

「どうか、これを・・・！」

そう言いながら差し出されたのは、綺麗な球体をした1つの玉だった。

「え・・・？私に？」

「どうか、お持ちください。それは、私達が巫女である何よりの証拠。」

「巫女！？私達って・・・！？ええ！？」

「どうか、どうか、お受け取りを・・・！」

（どうしよう・・・受け取ってもいいのかな？）

悲痛な訴えをしてくる相手に、戸惑う未来だったが。

「・・・ありがとう。」

ゆつくりと、自分がいた座席から離れると、女性へと近づく。そして、差し出された球体を受け取ってしまった。

「・・・綺麗。」

それは、ビー玉ほどの大きさの丸い球体だった。七色の模様が綺麗に入った美しい玉。思わず、持ち上げて光の角度を変えてみると、ぼんやりと浮き出るように輝いたのである。

「すごく綺麗・・・！珍しい。」

いつまでも見続けていたくなるような、レトロで懐かしい美しさ。思わず、見入ってしまった。

「表面もつるつるしているし・・・石？宝石？なんだろう・・・？」
（気に入っちゃった・・・！）

「・・・気に入っていただけでよかったです・・・！」
未来の心の声に合わせるように、そんな言葉がつむがれた。
泣き声にも近い安堵の音が、未来の頭に響いたのである。

「あ！？ごめん！これは、あなたのだったよね！？なのに私ったら
——！」

女性の言葉で我に返る未来。いくら綺麗なものでも、知らない相手から物をもらうなんてよくない。おまけに相手は、この場ではあまりにも異端の存在。違和感があり過ぎるほど、怪しい人物なのだ。

「ごめんね！これ、返——」

「お持ちください、『異界の巫女』！」

「い、異界の巫女！？」

「そうです。あなたは『異界の巫女』・・・！これで・・・あなたは、あなた様は、守られるのです。」

「はあ？何に！？」

「悪しき者から——・・・！」

「あ、悪しき者！？」

思わず相手へ視線を返せば、さらに未来は驚かされた。

「あ、あなた！？体が——！」

女性の体が透けていた。それどころか、ノイズのようなものが彼女にかかっており、ぶれるように左右へいびつに動いていたのである。
壊れたDVDの映像のように。

「どうしたのそれ！？」

「・・・もう、お別れしなければならぬようです・・・！」
ひどく陰しい声で彼女は告げる。

「私の力は、ここまでです。あの者の魔力を防げない・・・！」

「魔力！？あの者ってなに！？」

「・・・ひとつだけ、お願いがあります。」

「はあ！？」

「私と出会い、話、『虹の源』を渡したことは、決して他言なさらないでください……!」

「『虹の源』って……この玉のこと?」

「はい!ですが、あなたを助け、導く者のみには、お告げください!その者の名は……、……、そして——……です!」

「え!?!」

「なに!?!聞こえない!」

「……は、……ナイトです!どうか、どうか……!……は、私のことを、『マイ・シャーマン』と呼びます!そう呼ぶのは、……だけです!」

「だから、名前のところだけ聞こえないってば!」

「……の妨害です!異界の巫女様、どうかご無事で……!」

「ちょ、ちよつと待ってよ!お嬢さん!」

「——アイリスです。」

それまでで一番大きな音が頭に響いた。

「私はアイリス。守護の巫女として生きる者。そしてあなたは、コトネアスターを立て直すための、異界の巫女にして、『救いの巫女』と呼ばれる神聖な存在なのです……ミキ様。」

「!?!何で私の名前を!?!」

（教えた覚えもなければ、心の中で名乗った覚えもない!なのにどうして——!?!）

『私達は、対照的な一対となる存在です。魂はつながっているのです。お考えやお心を見ることは可能です。もちろん、過去の記憶なども……。』

「……もしかして、『過去の記憶』を見たの……?」

（私の昔の記憶はもちろん、家出の原因も——!?!）

「あ。悪しき者からのからの妨害です、ミキ様。申し訳ありませんが、ミキ様のお言葉がこちらに上手く伝わりません。」

「嘘付け!ノイズとか全然入ってないじゃん!?!誤魔化さないでよ

！ホント、そういうのやめてくれない！？プライバシーの侵害も甚だしいよっ！！」

「はい、深刻なのです。コトネアスターは悪しき者に侵略されつつあるのです。」

「無視かいっ!？」

「あなた様にとって、困難と試練の多き道になると思います。ですがどうか、見極めてください。出会うものすべてに対して、その姿身分、言葉に惑わされないでください。あなたはあなたの意思と直感を基に、相手のまことを見抜き、生き残ってください。まことの姿を見抜くのです!」

「まことの姿あ??」

「影ながら、ご武運をお祈りしています!・・・の巫女——・・・!?!」

アイリスと名乗った女性の顔を覆う布の下で、何かが光った。

(なみ・・・だ?)

そう認識した瞬間、バスの社内を照らしていた光が突然強くなった。

「——ああああ!？」

(まぶしい!目が・・・!?)

片手で荷物を抱え、もう片手で顔を覆う未来。

次の瞬間、体ごと下へ落ちる感覚に襲われた。

「なっ・・・きゃああああああ——!？」

感覚ではなく、本当に落ちていたのだ。

下から吹き上げてくる強い風。思わず目を開ければ、最初に飛び込んできたのは青い光。

「なに!？」

それは、見たこともない青光する文字だった。暗闇の中で浮き出るように、自分を囲む形で周囲を一周していたのだ。

思わず荷物を抱きしめ、首を上下左右に動かせば、真っ暗な空間の中を落ちていた。

感覚としては、防災訓練の時に救助袋から滑り降りるのと似ていた。

しかし、救助袋とは違って、自分の体はどこにも接しないで落ちている。

丸い筒状の中心部を、落ちていたのだ。

その筒状となっていたのが、青い光の文字であった。

（この文字以外は、光がない・・・！真っ暗だ。）

上下に広がる深い闇、左右はもちろん、見渡した周囲も漆黒だけしかなかった。

そのせいだろうか。自分を囲んでいる青光りの文字が、余計にその存在を大きく見せていた。

（なんて書いてあるんだろう？）

エジプトの古代文字とアラブの文字を合体させたような字体。

外国語が得意な未来でも、こればかりはわからなかった。

「てか！！おーちーるうー！」

めくれるスカートを抑えながら、荷物を抱きしめる未来。

そのまま、果てしない奈落に似た闇へと落ちていたのだが、

【30分経過】

「・・・・・・・・いつまで落ちるの？」

最初こそは驚いたが、変化せぬ周囲と自分の状況に、未来は少しずつ冷静さを取り戻していた。

（どうなってるの？ここはどこ？バスの中ではないのは確かだけど・・・？）

荷物を抱きしめていた利き手を離し、そつと光の文字へと手を伸ばす。しかし、離れすぎているせい、それに触れることはできなかった。

このまま、下へ落ちてぺしゃんこになるのではないかと、何度か下を見たが、相変わらずそこなしのような闇しかない。それは、頭上と同じことで――

「私どうなったの・・・！？」

未来は、混乱するばかり。

「大体、なんなのよ！あのアイリスって子は！？肝心なこと、なに

も教えてくれなかったし！」

落下しながら、次第に得体の知れない女性への不満を口にする未来。
「なんで見ず知らずの子に、巫女だのなんだのって言われて、謝られなきゃなんないの！？何で私が異界の巫女なの！？」

彼女会話自体、ろくに理解できない上に、自分が直面した現状に、未来のイライラは募った。

「——もういい加減にしてよ！これ以上、私を振り回さないでよ！！なにがコトネアスターを立て直すための救いの巫女よっ！！」
そう怒鳴った時だった。

カッ！

「え！？」

足元から、白い光が沸き起こる。

「綺麗な光——・・・！？」

神々しいような光が、足元から未来を包んだかのように見えたが、
ゴワッ！

「——ひ、光が真っ黒になったあ！？」

煙のような黒鉛が、モクモクと彼女の体を拘束し始めた。

「いやあー！だ、誰か助けてえええ——・・・！！」

そうは叫んでみたものの、息苦しさばかりが強くなる。

（も、もお・・・なんなのよー・・・！）

言いようのない怒りで、未来の視界は次第にかすんでくる。

“そういう、見つともない真似しないで！お父さん恥ずかしいよ！”

“それはあなたの實力じゃないんだから！”

聞きたくない声と、思い出したい思い出がよみがえる。

うるさい・・・！

“あんなにいろいろしてあげたのに、こっちが困ったときは助けないのか！？”

“本当は、やめないでほしかった！やっと肩の荷が下りると思ったのに。”

うるさいうるさいうるさい！！

もうっ！

「——いい加減にしるおおー!!」

叫んだ瞬間、視界が開けた。そして、大きな爆発が起こった。
「うつ、きゃあああああああああ!？」

(今度は何!?)

爆音の中、周囲の景色の変化を感じる未来。

「わあー!」

「に、逃げろおー!」

「ひ」

「きゃー!」

(え!?)

自分以外の声に気づき、瞬きしながら周囲に目を凝らす。

「ええ!？」

爆発の煙が晴れた頃、彼女が目にしたのは。

「なにこれ……?」

目もくらむばかりの財宝と、色鮮やかな花々に彩られた広間。
豪華な装飾が施された部屋の中央に、未来はいたのである。

「……すごい。」

部屋の内装にも驚いたが、自分の今の状態にも驚かされた。

「……私、浮いてる……!？」

目だけで下を見れば、体が床から数メートルほど浮いていた。

真下には、魔法陣のような見たこともないデザインの円陣模様がえがかれていた。

それが青く光、自分を浮かせているのだと、何故か未来はそう思った。

「どうなってるの……?」

「おい!あれは!」

ボーゼンと浮かぶ未来を見て、一人の男が声を上げる。声の主を見

れば、中世ヨーロッパ風の服を着た男性だった。それも従者が着るような服である。

「あ、あの浮いてるのは……！」

「え？私！？」

叫びながら従者服の男が指差すので、思わず未来も自分を指差した。

「み、み、巫女様だ……！異界の巫女様が光臨されたぞ……！」

「み、巫女様！？それも異界……！」

“あなたは、コトネアスターを立て直すための、異界の巫女”

先ほどの言葉がよみがえる。

（ちよつと待つて！まさかここは――！……！？）

「巫女様だ！コトネアスターに救いの巫女様が参られたのだ！」

「やっぱりコトネアスターなの……！」

（てか、コトネアスターってなんなの……！？どこなの……！？）

パニックを起こす未来にかまわず、周囲の人々は大きな歓声を上げたのだった。

第1章 出会いはプライバシーの侵害付き（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342j/>

異界で世直しアドベンチャー

2010年12月19日10時22分発行